C. leucantha では葉の腹裂片が退化し，いちじるしい場合には三角形の葉形となる。この形のものはとくに陰湿地の腐木上に生育するものが多く，*C. uniloba* はそのような型の植物である。二裂せず三角形の葉をもつものから，完全に二裂する葉をもつものまで，様々な中間段階の形が同じ一つのポピュレーション内にみられる。このような変異についてはこれまであまり深く解析されていないが，ヨーロッパや北アメリカに産する *C. leucantha* でも観察された。

5. 北海道利尻島および大雪山から記載され日本特産属とされた *Cryptocoleopsis imbricata* Amakawa と，北アルプス立山から記載された *Gymnomitrion integerrimum* は同じものである。Schuster (1974) はすでに *Gymnomitrion integerrimum* が *Cryptocolea* や *Cryptocoleopsis* に近縁のものであると述べているが，論議の中で彼が言っている terminal branch はこの種類にはなく，すべて ventral-intercalary か lateral-intercalary の分枝となる。このような点から *Cryptocoleopsis* は *Cryptocolea* と共に Jungermanniaceae の中でも Lophoziaceae subf. Jamesonielloideae に近い群を構成すると思われる。

□何　豊吉：**台湾熱帯植物彩色図鑑 3** (Ho Feng-chi: Tropical plants of Taiwan in color 3 356 pp., 325 pls. 1982. 恒春熱帯植物園標本室, 台湾. $40. 何氏は台湾ではじめて英国リンネ学会会員になった人という。それだけに本書では写真もすぐれているのがわかる。本書ではタカトウダイ科からはじめて，合弁花類にいたる範囲で，主に樹木を集め，しかも台湾に自生するもの以外にも熱帯原産の種を拾っているので参考となるものが多い。それに第一巻にくらべ大分写真のとり方がよくなっているので気持がよい。各頁の上部に花又は果実の写真を載せ，下部に学名と異名の出典，記載，産地，用途等を記している。中国発行の植物誌や図鑑はこの頃数多く出版されるが，これらでは漢字の書体が変って，私などは読むのにどうも苦労するが，台湾発行なので，旧書体であるのも助かるものである。　（前川文夫）

□北村四郎：**北村四郎選集 I　落葉** 349 pp. 1982. 保育社，大阪. ￥3,800. 北村四郎氏は中々著作の多い人である。専門論文は別刷をくばるが，別刷がなかったためにくばることができなかったとしてこれらをまとめたのが本書であると記されている。主に「京都新聞」に現代の言葉として載せたものとタキイ種苗会社発行の園芸新知識に草木風興誌としてともに10年以上にわたって連載されたものが主である。前者は話題は広く生物学全般にわたるが，後者は主に顕花植物の属や種をテーマに論述している。読んでみると中々に面白く，簡単に触れたものにも案外深い興味が見出せるし，所によってはその後の変化を後記として追記されていて親切である。氏の得意とする古いものに対する追及も中々鋭いものがあり，処々に古い文献の見事な挿図が引用されているのもまた参考となるであろう。　（前川文夫）